

北部九州戦国期城館の平面構造に関する研究

岡寺, 良

<https://hdl.handle.net/2324/1398307>

出版情報：九州大学, 2013, 博士（人間環境学）, 課程博士
バージョン：
権利関係：やむを得ない事由により本文ファイル非公開（3）



氏 名 : 岡寺 良

論文題名 : 北部九州戦国期城館の平面構造に関する研究

区 分 : 甲

論 文 内 容 の 要 旨

日本各地には3～4万とも言われる膨大な数の戦国時代の山城・居館（まとめて城館という）が残されている。これらは各地域の戦国時代の様相を語る上では非常に重要な資料であるが、その大半は発掘調査等の本格的な調査が行われておらず、発掘成果のみではデータが不十分であるという現状がある。

本稿では、この城館という重要な資料を戦国時代の地域史解明につなげるため、発掘調査を行わずとも、縄張り図（城郭平面図）作成の手法を中心とした「城館研究（縄張り研究）」という研究方法によって、山城を読み解き、北部九州における戦国期城館の構造の解明を目的とする。また、昨今の全国的な城館の研究状況に鑑み、戦国期城館群の解明に必要な類型化とモデルを提示することも目的とした。

論文は、「総論篇」と「各論篇」の2篇からなる。本論を記述した「総論篇」は、概要を述べる「はじめに」に始まり、北部九州戦国期城館の調査・研究の現状と課題について言及した「第1部」、北部九州戦国期城館群の様相と構成を探る実証研究を行った「第2部」、結論を述べる「おわりに」で構成される。「各論篇」は、煩雑を避けるため、本旨とは直接関連性が薄いですが、本論を説明する上で必要不可欠な福岡県内の城館遺跡一覧、個々の城館の詳細検討、引用文書史料などについて詳述し、総論篇から参照できるように構成したものである。以下、本旨に関わる総論篇の概要を述べる。

まず、第1部では「北部九州戦国期城館の調査・研究の現状と課題」と題し、戦国期城館の調査方法として、縄張り調査・測量調査・発掘調査の調査方法とそれぞれの特徴を述べて城館調査のあり方について述べた。さらに福岡県内を調査対象とし、県内の全中近世城館がどれだけ所在・分布し、さらには現段階においてどこまで調査が進んでいるかを明らかにし、今後の調査の方向性について提示した。県内を筑前・筑後・豊前地域の3つに分けて比較検討した結果、筑前地域は城館数が多いが、縄張り調査された数も比較的多く、研究者個人による活動により、地域全体の様相が明らかになりつつある地域と判明した。一方、筑後地域は逆に城館数が少ないにもかかわらず、調査対象が主要城館のみに偏在しており、今後の調査・研究が最も必要とされる地域と判明した。そして豊前地域は、筑前地域のように研究者個人による活動に加え、行政による発掘調査・総合調査が比較的行われている地域であるとわかり、各地域において調査・研究状況は必ずしも一様ではないと言えた。この状況を打破し、全県的な状況を明らかにするには、縄張り調査を基本とするさらなる県下の悉皆的な調査を行い、県内遺跡の実態の把握を進めるべきである状況が明らかとなった。

第2部では「北部九州戦国期城館群の様相と構成」として、第1部を受ける形で、福岡県内の戦国期城館の内、国人領主秋月氏の城館を対象として検討を行った。秋月氏の各城館について縄張り調査によって平面構造を明らかにし、それらの平面構造から、城館群の類型化を行うことで支配領域内の城館構成を明らかにし、北部九州における戦国期国人領主の城館構成のモデル化をはかった。

すなわち秋月氏に関連する個々の城館の縄張り構造（平面構造）について、縄張り図を基に検討を行い、次の結論を得た。秋月氏の支配下にある城館の中でも、畝状空堀群を備える城館の分布域を見ると、「本城（御隠居城含む）」あるいはそれに近く、密接な関係にあったと考えられる城館と、支配領域の「境目」領域に当たる城館のみに認められた。これは裏を返せばそれら以外の城館、たとえば、本拠地

と「境目」領域との中間領域にあるような城館には、畝状空堀群は確認できない。このことは、防衛戦略上において、まず、いわゆる「最後の砦」となる本拠地たる「本城」と、外部勢力との武力衝突が最初に想定される「境目」領域の城館を最重要視し、その城館に対して優先的に畝状空堀群の敷設・改修を行ったものとみて、秋月氏の支配領域の防衛を核とした城館構成のあり方についてモデル化を行った。

しかし、秋月氏以外の周辺地域における畝状空堀群を備えた城館の分布を見ると、畝状空堀群が必ずしも秋月氏の城館にのみ見られるものではなく、先のモデルの妥当性に疑義が生じてきたため、改めて周辺地域の城館の中でも技巧的な畝状空堀群を持つ城館、すなわち空堀の本数が多いばかりではなく、横堀と組み合わせて曲輪群を一体的に防御するようなものの分布を見た。その結果、秋月氏と同盟関係にあるような勢力の城館がほとんどであり、秋月氏が敵対勢力として見なした豊臣勢力に対する構えによる結果と想定された。

以上より、秋月氏の城館構成について周辺の同盟勢力の城館も含めたモデルを新たに設定した。これが本稿の結論である。昨今の城館研究では、まずは特定地域の城館構成モデルの提示を行うのが最重要課題となっている状況において、本稿では「秋月氏の城館構成モデル」の提示を行うことで、城館研究における一つの課題に対して回答を投げかけ、城館研究の進展を一つ進めた形となろう。

また、本研究の成果は、単独の国人領主の戦国期における政治的動向を明らかにするばかりではなく、他の領主事例についても、相互の比較検討を行いうる研究モデルの提示にもつながる。城館を単なる中世武家領主の軍事的拠点のみとして理解するばかりではなく、中世の在地における領主支配の実像を探る上で、文献史料に勝るとも劣らない「資料」としての学問的価値を明らかにしたといえよう。